

ク式土器^e群に続くものではないだろうかとの見解を示し、大井晴男氏はオホーツクd・e群におくれる「接触様式」とし、擦文第2期末から第3期と併行するものであるとしている。石附喜三男氏によると「擦文式文化とオホーツク文化が接觸したのは擦文式土器文化の側から言えば最終形式よりも一時期前、すなわち、横走綾杉文、小格子目文、文様帶複段文様が主として盛行する時期（擦文IV）であり、オホーツク式土器の貼付式浮文（藤本分類e群）の時期である。そして、そのような文様を有する土器はオホーツク式土器中のやはり末期型式とみられるのである。」との見解を出している。このように諸説が多くあり、融合形式とオホーツク式土器、擦文式土器との共存関係があまりはっきりとしていない。また、これに加えて、地域差・時間差及び二つの異質の文化が互いに接觸する原因は何なのかも考慮にいれて、融合形式を考えなければならない。

さて、十勝太古川遺跡の融合形式は、どのような位置をもつものであろうか。この土器は住居址周縁部から出土したものであるが、この地方において、融合形式の文化が存在したことを考えることはできず、前述したように釧路のルートをたどって流入したものと思われる。擦文式土器との関連は、第8号住居址盛土下より出土しているので本住居址よりも古いということは推定できる。

以上のように、オホーツク式土器e群、融合形式の土器片が十勝地方から出土したことは、オホーツク文化の研究に重要な意義をもつものであり今後の調査に大きく期待するところである。

（国学院大学学生）

引用文献

- ①浦幌町教育委員会『十勝太古川・若月遺跡発掘調査概報—第一次発掘調査—』1973
- ②石橋次雄・木村方一・後藤秀彦『十勝太若月—第二次発掘調査—』1974
- ③藤本強「オホーツク式土器について」（『考古学雑誌』51-4）1966
- ④東京大学文学部考古学研究室『常呂』1967
- ⑤未報告
- ⑥大場利夫・奥田寛『女満別遺跡』1960
- ⑦大場利夫「モヨロ貝塚出土のオホーツク式土器」（『北方文化研究報告』12）1956
- ⑧斜里町教育委員会『ピラガ丘遺跡—第Ⅱ地点発掘調査概報—』1972
- ⑨駒井和愛編『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下 1964
- ⑩大沼忠春・本田克代「羅臼町出土のオホーツク式土器について」（『北海道考古学』6）1970
- ⑪宇田川洋「オタフク岩遺跡」（『羅臼』）1971
- ⑫石附喜三男「伊茶仁遺跡」1973
- ⑬児玉作左衛門・大場利夫「根室国温根沼遺跡の発掘について」（『北方文化研究報告』11）1956
- ⑭大沼忠春他『浜別海遺跡』1971
- ⑮沢四郎他『北海道厚岸町下田ノ沢遺跡』1972
- ⑯沢四郎・宇田川洋・豊原熙司『弟子屈町下鎌別遺跡発掘報告』1971
- ⑰大井晴男「擦文文化とオホーツク文化の関連について」（『北方文化研究』4）1970
- ⑱石附喜三男「擦文式土器とオホーツク式土器の融合・接觸関係」（『北海道考古学』5）1969

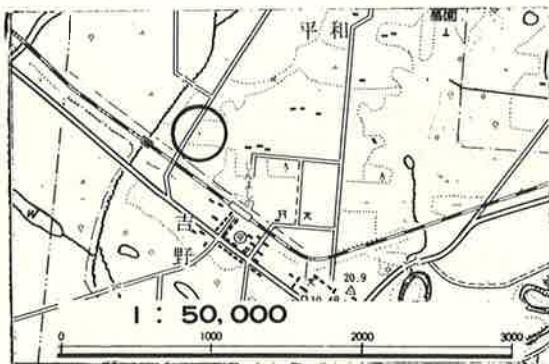
底面に貝殻背圧痕文のある土器

後藤秀彦

I

ここに紹介する土器は、北海道十勝郡浦幌町字平和85番地所在の平和遺跡で、浦幌高校郷土研究部員の手により採集され、現在浦幌町郷土博物館に所蔵されているものである。平和遺跡(Map 1)は、十勝川の支流下頃辺川の東側に形成された通

称「吉野台」と呼ばれる段丘の西端部に位置する地点で現在は、土砂採集のため完全に煙滅してしまっている。本遺跡は、1967年と1970年の2度にわたって発掘調査がなされ縄文早期の聚落跡であることが周知されているが、ここに公表する資料は、その後に発見されたものであり、浦幌高校郷



Map I 平和遺跡附近地形図

土研究部がその写真を発表したことがある。また筆者もかってこの土器について簡単に触れたことがある。

II

本資料は、底部の半分弱が残存しているのみである。底面にはホタテ貝の貝殻背圧痕文をもち胴部から底部方向に向って集合沈線文が施されている。文様は更に太めの絡条体圧痕文を点在させ、底部の周囲には製作者の親指と思われる拇指形の凹みが圧焼している。胎土には石英粒を含み色調は全体として黄褐色で焼成は良好である。前述した絡条体圧痕文は、横位方向に無原則的にみられ貝殻背圧痕文とともに本資料の編年的位置を示唆している。(Fig. 1)

III

本資料の位置付けは、前述した絡条体圧痕文と貝殻背圧痕文の存在からアプローチが可能であると思われる。北海道においてこれらの条件と縦位の集合沈線文という組み合わせを満たすもの、もししくはそれに近いグループとして考えられるものは次のようなものである。^①テンネル式^②鷗川町二宮出土の土器^③暁式土器Ⅱ類^④浦幌町平和出土の土器^⑤これらについては各々報告が提出されているがこのうち集合沈線文をもつものは①③④であり、絡条体圧痕文をもつものは①④であり、貝殻背圧痕文をもつものは②③④である。

いずれにしてもこれらの土器群と何らかの関係がありそうであるが、端緒的な絡条体圧痕文の存在、深く刻まれた縦位の集合沈線文の存在は一見してテンネル式土器の特徴の範囲に入いるもので

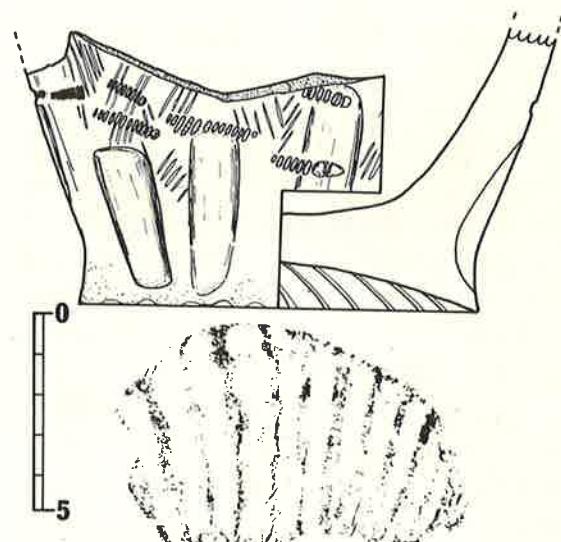


Fig. 1 貝殻背圧痕のある土器

あり、貝殻背圧痕文の存在は暁遺跡にあっては暁式Ⅱ類に伴い、平和遺跡にあっては集合沈線文の顕著な暁式Ⅲ類に近い土器群に施される傾向が強いようである。また、^③鷗川町二宮出土の土器も暁式Ⅱ類に近いようである。テンネル式における貝殻背圧痕文の存在が明確ではないため断言はできないが、一応テンネル式の範囲に入いるものと考えてよいと思われる。（浦幌町郷土博物館）

引用文献

- ①浦幌高校郷土研究部『浦幌町を探る — その2 — 先史遺跡の現状 — 保護と対策について —』1970
- ②後藤秀彦『浦幌町郷土博物館案内』1971
- ③藤本英夫「底面にホッキ貝紋のある土器」(『先史時代』3) 1956
- ④明石博志「十勝地方における土器と細石刃を伴う文化」(『北海道考古学』6) 1970
- ⑤浦幌町教育委員会『平和遺跡』1971

1974年8月15日	印 刷
1974年8月20日	発 行
編 集 後 藤 秀 彦	
発行責任者 野 沢 貞 男	
発 行 所 浦幌町郷土博物館 (089- 56)	

北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地

印 刷 所 大同出版紙業株式会社

北海道帯広市西7条南6丁目